

## ゲシュタルト的まとまりは認識的役割を果たしうるのか

山田圭一 (Keiichi Yamada)

千葉大学

趣旨文でも述べたように、本書がもつユニークさは、単に高次性質の知覚可能性を説明するための知覚の理論を提示するだけではなく、そのような理論が満たすべき制約についても考察したうえで、その制約を自らの理論に対しても課しているという点にある。源河によれば、知覚についての理論は自然科学的な知見と整合的であったり、意識の現象的な側面を掬い取ったりするだけでは十分ではなく、「高次性質の知覚可能性を主張する理論は、存在論と認識論に影響を与えうるものでなければならない」(45) ののである。

そこで私は今回、源河の提示する高次モード知覚説が本当に源河の期待するような認識論的影響を与えうるのかという点について検討してみたい（あらかじめ断っておくと、私自身はここ最近ウィトゲンシュタインのAspect転換の議論をどう理解すべきかについて考えていて、その観点から源河の高次知覚モード説には大いなる魅力と強いシンパシーをいただいております、知覚理論そのものとしてはできる限りこの立場を後押ししたいと思っている）。

まず源河の説明によれば、高次性質が知覚可能であるということができると、

・認識論への影響として「知覚によって直接的に正当化されうる信念・判断の種類が多いと考えられる」(42) ことになる。

たとえば、何か赤いものを見ている場合に、その赤さの視覚経験のみによって「これは赤い」という判断が正当化されるのと同様に、もしも優美さを「見る」ことができるのであれば、その優美さの視覚経験のみによって「これは優美である」という美的判断が正当化されることになる。しかしもしも優美さを直接見ることができず、それが何らかの信念を介した推論的な帰結にすぎないのだとすれば、そのような推論プロセスの正当化が必要となり、「これは優美である」という判断は知覚によって直接的な正当化ができないことになる。この点において、確かに高次性質が知覚可能性だということには認識論的なメリットがあるように思われる。

しかしながら、ここで問題となるのは高次モード知覚説における「高次性質の知覚」ということの内実である。高次モード知覚説は「知覚経験を知覚されるものと知覚のされ方（ゲシュタルト的まとまりのモード）に分け、低次性質の知覚を前者で、高次性質の知覚を後方で説明する」(160)。たとえば、色や形といった非美的な低次性質が特定のゲシュタルト的まとまりをもって経験される場合に〈優美さ〉という美的性質が知覚されていることになり、「美的知覚とは、対象がもつ非美的な性質の集まりが「美的なモードで」知覚的意識に現われること」(201) ということになる。

しかしもしもそうだとすると、このようないみで意識経験のなかに現われる美的な性質は「知覚されている」というよりは「意識されている」とか「気づかれている」というほうが自然なものになっているのではないだろうか。そしてここでのゲシュタルト的まとまり

が知覚される対象（世界の側にある何か）がもつ性質ではないのだとすると、それは経験の側がもつ性質ということになってしまうのではないだろうか（少なくとも源河が知覚経験の透明性の議論をしているときには、現象的な高次性質を経験の性質として論じているように思われる）。そしてもしもそうだとすれば、このような意味での美的性質の知覚が認識論的に正当化しうるのは、素朴に考えれば、「これは優美である」という判断ではなくて、「私にはこれが優美に見える」という判断なのではないだろうか（仮にそれを経験している本人としては、「この絵は優美である」という判断を正当化するような世界のあり方についての知覚経験をもっていると思っていても）。この最後の問いに関しては、源河自身が第7章で「知覚の錯誤説」として検討している問題と重なるところだと思われるが、そこでの説明においてゲシュタルト的なまとまりが知覚判断の認識論的に正当化において本当に何らかの役割を果たしているのか、そしてこの説明モデルで先述の知覚経験による正当化がもつ直接性というメリットが本当に享受できることになるのか、といった点に関しては議論の余地があるように思われる。本発表では以上のような問いについて検討することを通じて、高次知覚モード説における高次性質の知覚とはどのようなものであり、それがどのような認識論的な影響を与えうるのかという点について考察してみたい。

さらに、源河自身は高次モード知覚説の適用範囲を美的性質と不在を中心に考えており、種性質や他者の情動に対してはそれほど乗り気ではなさそうに思われるが、上記の考察を踏まえて、「犬である」や「彼女が悲しんでいる」と知るためにゲシュタルト的なまとまりが果たしている役割についても考察し、これらの高次性質に対して高次知覚モード説を適用するという可能性についても検討できればと思っている。